會報

昭和17年9, 10月 | 119 | 日本山岳會

風致と水電

塚本繁松

最近奇妙な新聞記事を見た。大阪朝日新聞六月二十日のもので、「黒部峡谷風致、電力の板挟み」といふ題である。おや今頃黒部にそんな問題がまだ殘つてゐたのかと私は驚き乍ら記事を讀んだ。内容は

北アルプスの中部山岳公園地區指定に伴ひ景勝保存か、産業開發かいづれを優先的に取扱ふべきか、内務、厚生、遞信の關係筋でいつも話題となつてゐるがその一として黒部峡谷は毎夏黒部水系發電所の貯水池から六月一日以降三ヶ月間一定水量を流出させ、峡谷に美觀を添へて來たが、日本發送電では時局下生産力擴充のため發電所貯水池の放水を取止め、發電所のフル運轉を行ふべく關係各省に交渉中である。

内務厚生兩省では黒部峡が風致地區の關係からこれを重視し、厚生省の田村林學博士、内務省の内村技師の一行は二十二日來縣日本發送電や富山縣當局立會のもとにこの問題を協議するが、この結果は果して景勝の保存か發電力の增强か、二者一選の問題はいづれに落ちつくか注目の的となつてゐる。(富山)

ざつと右のやうなものであるが新聞記事の事だから何處迄眞相を傳へてゐるか疑問だが今頃かうした事が問題になり、其爲に内務厚生兩省から技師が出張せねばならぬ程の重大な問題が起つてゐるとは何だか常識として判斷出來ないやうな嘘みたいな話のやうに思はれてならない。

風致保存か産業開發かの問題は既に何年か前に解決され、黒部の發電地區は産業開發の犠牲となつて風致的には全く死滅してしまつた筈である。我等は黒部を失ふ事を大いに慨いたが結局どうする事も出來なかつたのである。私などあれ程好きであつた黒部へ今は全く足を踏み入れる氣はなくなつた。傷ましい黒部の現狀を見るにたへないからである。

黒部の大電力發電は必しも國防の爲ではなかつた筈だが、現在では國防産業に甚だ大きな貢獻をしてゐる事は爭へない事實で、もし黒部が風致保存の爲に發電を全然行はなかつたとしたら我が國は戰爭に負けたらうとは思はないが、電氣があつてよかつたと思つてゐる。しかし絶體必要な電氣は黒部でなくては起きない譯ではないのだから黒部の風致を失つた千秋の恨事は今も昔も變る事はないのである。

しかし一旦産業開發の爲に黒部を犠牲としてしまつた以上、しかも今國防産業上少しでも電氣の欲しい時代に、よだれ程の水を流してそれで風致保存なりとごまかすかどうかについて、わざ〳〵中央官廳から技師が遠路出張せねばならぬものとすると、これは正しく憤飯ものと言ふべきであらう。今更發電地區に一滴の水だつて無理に流す必要はないではないか。最後の一滴迄取入れて發電すべきであるとは何者も異論のない所ではないかと思ふ。それをそんな事になつたら黒部の谷の風致はどうなるかなんて現地を見に行く役人は一體どうゆう積りなのか知らんと不思議に感ぜずには居れない。

聞く所によれば、昔黒部の風致保存か水電開發かが大問題となつた際、水電を許可するについて役所間に一つの妥協が行はれたものらしいのである。夏期人の多く行く際だけは何箇かの水を放流して風致を保存するといつた子供だましみたいな妥協なのである。それは役所間の面目の問題であつたらうが、前にも言つた通りよだれ程の水を流して黒部の美觀が保てるものでも何でもないのである。それならば今迄發電側は夏期放流を實行して來たかといふと甚だそれが怪しいので、夏も水を放流しないのが事實であつたやうだ。

監督官廳の役人でも來るとなると慌てゝ想定の水を流しこれこの通り實行してゐると見せてゐたやうなものだつたらしい。柳橋だけの發電當時、私は夏は何度となく猶又の取入口を通つたが、一滴の水も流れてゐない事が多かつた事を覺えてゐる。

目次

風致と水電……塚本繁松…1
軍と山岳人との提携……西岡一雄…2
折木鑛泉と五社山……行方沼東…4
英彦山に登つた話……冠松次郎…4
山での責任……跡部昌三…5
圖書紹介……6
會員通信……7
會務報告……9

さうしたかくし事を今は公然と行へる時節となつて今度の新聞記事のやうな申請となつたものであらうが、それさへすぐに許可されず、許可していゝかどうかについて技師を派遣するといふのが如何にも役所らしいと思ふ。こうした形式的の事は今後はやめられるとかいふから結構な事だと言はねばならない。

さて私の言ひたい事は何かといふと、役所間でどう妥協しようと水電と風致の保存といふ事は絶對に兩立しないのだといふ事である。水の流れてゐない溪谷に風致の殘存する譯はないのである。申譯によだれ程の水を流せば少しばかり風致が保存されるなどゝ言ふ事は神秘ともいふべき風致を冒瀆するものだと思ふ。そして一旦失つた溪谷の風致は、全く發電を中止しない限り永久に甦る事はないのだといふ事である。それだから風致保存を絶對必要とする箇所にはかりそめにも水電を起しては取返しがつかなくなるのだと思ふ。私の眞實に言ひたいのは外でもない、これ以上黒部に水電を起して貰ひたくないといふ事である。必要な電氣は何とかして外の方法で起してもらひたいのである。黒部も今尙上流と支流が未發電の儘殘つてゐる。これ等も若し現在資材さへ十分あつたら無理矢里發電されたらうが、資材不足の爲に、幸にも（妙な幸だが）未發電で殘つてゐる。戰時中は仲々着手出來ないのではないかと思ふが、資材が豐富になるとやりかねない。

我が國も今や飛躍的な大發展の途上にある。我が國威の及ぶ所今迄の何十倍となつたが、さて省みられるのは祖國の美しい山河の事である。火急の必要に迫られて貴重な原始林は伐り拂はれ、水電の爲に溪谷の風致は空しく死滅して行くのを何時迄も成行にまかせて置いてよいであらうか。國破れて山河ありでは困るが、國益々榮えて今や山河なしでも亦甚だ困る事ではないか。

今や世界最大の富强國を敵にして必死の鬪爭が行はれつゝあり事情は益々急迫するであらうが、今や我が國威は廣大なる地域に及び增産目標も必ずしも迫い本國の風致をとことん迄犧牲にして迄行はなくてもよい時節が到來しつゝあるのだと思ふ。殘すべき原始の風致は決然として殘し大自然の惠みに依て大國民を育て上げて行くといふ大國策を今こそ確立すべき時ではないか。自然を忘れ自然から遠ざかつた生活のみを續けねばならぬ國民は決して最後の勝利者となる事は出來ないのだと思ふ。都會から大人物が出ないといふが、自然を忘れた生活をする都會人から人物の出る譯があるまい。しかし乍ら都會からだつて人物が出るやうでなくてはならぬのである。その爲には是非共都會人にも自然を忘れない生活をなさしめる必要が絶體に大切なのだと思ふ。八百萬の東京市民を自然から隔離するような政策が今後も長く續けられるような事があつたら一大事だと言はねばならない。

私共は目前の危急を決して忘れてゐるのではないが、右のやうな意味から風致の保存を要望し、又最少限度の原始風致區殘存を要望してやまないものである。この意味からこれ以上の黒部發電の中止尾瀬の發電中止富士山原始林伐採中止等を衷心より熱望してやまない次第である。

（十七年八月）

山日記新版

山日記の昭和十八年版は目下印刷進行中でありまして年末迄に市場に送りたいと鋭意努力中であります。

山小屋、山案内、登山團體等に大增補訂正を行ひ依然上質紙を使用御期待に添ふ豫定であります。

軍と山岳人との提携

西岡一雄

昭和十二年の夏、私は大臺ヶ原に遊び雨のために東ノ川の遡行を中止して歸阪し、その直後大阪帝大工學部を訪問し、配屬將校河野大佐にお會いして卓を圍んで山の樣々な御話を交した。

その方は非常に平民的な、くだけた人であつて、私の話に對し一々よき理解を以て頂いた。調子づいた私は、地圖と登山家、登山技術と軍隊、軍隊精神と登高氣魄及びその裝備等につき話し尙今日の五萬分一に往々間違ひのあることを指摘すると甚だよろこばれ早速その筋へ訂正すべき個所を通知されたき旨申しをられた。又軍隊と山岳家との相肯點特にその携帶品の近肯を强調し相提携して共に研究すべきことを申述べたことを覺えてゐる。その時、大佐は今後日本の作戰はどんな方面へ飛ぶかも知れない。或は炎暑やくが如き南方、或は冱寒骨を刺す極北、上陸一つにしても平沙靑松の濱とのみに限らず、峭立する岩壁を暮夜ひそかに登ることもあらう、或は用兵上誰れしも及びもつかずといふ嶮しき岩山を登攀して敵の意表に出ることもあらう。そういふとき登山家のもつ技術及び用具は大いに參考になる。君にきけばそれに適應する用具裝備が一々登山者側にあるといふ。追々その敎へを乞ふだらうといふことであつた。私はそれに對し既に戸山學校かどつかで陸軍の方も、岩登りを始めてゐるとかきゝますがと問ふたがそれに對しては大佐は知られなかつたかと思ふ。（尤も、この事は河野さんでなくそれから後に師團參謀を訪問した私の問答であつたかも知れない）

特に現在にあつて感慨無量なことは、この對面後五年にして、河野大佐がいはれたことが符號を合するが如く着々と實現してゐることである。夢物語かと考へたお噺譯が現實の問題となつてきたこと

である。即ち馬來に、ビルマに、そして南印に日本は兵を進め、北はアリユシヤン群島の一角に、眞に、東西南北、今後は更にどこ迄飛躍するか全く想像も及ばない。その地點こそ指示されなかつたが或は大佐の單なる即興的氣焔であつたかも知れぬが、五年以前既に今日あるを豫想してか話題はそういふ風にはづんだのであるが、この大佐の先見には敬服の外はない。

この時の話を契機として、私はすぐに「山岳戰の示唆」「軍隊スキーについて」の二篇をかいて、これを大阪師團參謀部へ提出したのである。正式の手續きをふむ術を知らなかつた故に、單に狀袋に入れてこれを司令部の受付けへ渡したのみであつたから、果して首尾よく師團參謀の手に入つたか否かは判らないが、又無事に入つたとしても恐らく當時の參謀の方々にはこんな布衣の一老書生が奉るつまらぬ進言等を正直に檢討する雅量ありやは疑はしい。何故そういふ憶測を逞しくするかといふと、當時私は軍の將校達の需めにより特別仕立の寢袋をつくつて納めてゐたから、軍の人達にあふ機會に惠れてゐた、ある部屋で各國のスキー兵の裝備圖を見たのもそこでの事であつた。それとなく軍對登山家の相肖を說いて共通研究機關の促進を提言するが、先づテンデ話にされなくつて不快の思ひをしたことの覺えがあるから私の進言など闇から闇へと葬り去られたことゝ信ずる。同じ頃、四國善通寺師團へ納入するビトンを買ひにきた人がある。特別な寸法をもつビトンであつたから應じ兼ねたが、私としての意見を具陳して申上げてくれといつたが矢張り何の手應へも反響もなかつた。それで私はもう遠うの昔にあきらめてゐたのである。あきらめたとはいふがこの考へ方は根强き私の宿望であつたので——現に昭和十一年共立社發行の「登山講座」第四卷にも一寸このことに關してふれてをゐたのであつた——あきらめかねてゐた。

しかるに今夏、我軍は遂にアリユシヤン群島の一つアツツ島に敵前上陸を敢行した。その畫報によると兵士は皆脊に輪輻を負つて行進してゐる。そのワカンジキをよく見ると、これは越中芦峅寺のと同型であつた。これを見て私は感じた。軍がいち早くかういふ登山具の一つを用兵上採用されたことについて滿腔の感謝と敬意を表明するが同時に研究にまだ不足點があるやうにも考へられた、といふのは、あのやうな地形と極北に近き積雪ではむしろ爪なき固定式の方がより便利ではないかといふ風な疑問が私の方にあるからである。

話は前後するが、今年初春、我關東軍はいよ／＼スキーを採用することになつて、多量を民間に注文することになり私もその最初の相談にあづかつた。しかし私の微力はそれを引受け難く遂に一指をも染むることなく傍觀する外なかつたが、ジツトみてゐると、これをつくる職人にもこれを受負つた商人にも全く感激も誠意もなく、このスキーは吾國兵器の一つであるといふ自覺覺念をさへ缺き、唯規定の寸法と命ぜられたる形さへ違はなければよいとするが如き、怖ろしく非國民的考へで製作に從事してゐた。この寒心すべきスキーはその受渡しにはパスしたと思ふが、恐らくは一夏で全部が使用に堪へぬ程度にも狂ひを生じたことゝ信ずる。若し最初これが嚴格なる檢定を必要とするならば合格スキーは實に稀であつたと思ふ。商人は唯利益のため職人は唯事務的にそこに何等報國の赤心なく責任觀念もなかつた。そこに私の志士的義憤はあつた譯である。

話はちがふが、この軍隊スキーと私の考へてゐるスキーとの間にある開きを感じてゐたことが氣の小さな私をイラ／＼させてゐる。私案によると短スキーといふ一點のみが合致してゐるが、その寸法型巾構造締具に至る迄陸軍案には贊成出來難いのである。細目は控へて、今一歩を進めて大衆スキーと雖も軍の意向に合致すべく、いつにても徴用に應ずる用意のためには、使用するスキーに一定の規格を定めてをかねばならぬと考へる。クツも同じことがいへる。このためには一般スキーの長短、型を凡そ二三種に規定する必要がある。そしてA型靴は丁度A型スキーに合ふといふ具合にしてをくのである。締具の問題、ワツクス乎シール乎の問題、携行品、裝備、以上はスキーの場合であるが、兵士に岩登り術の要領を會得さす事も何でもないやうなことであるが兵士はこれにより危險と苦勞と疲勞少なくして、しかもより高きより嶮はしき岩壁を完全に制壓して敵の意表に出て攻擊したり偵察することが出來る。かくして日本山岳兵の下地を追々つくつてをくのである。きくところによれば陸軍では既に數年以前よりある種の兵に岩登りの技術を授け錬成に餘念ないとある、然らば尙更知識を山岳人の間にも求めて、提携し將來のよりよき物のために備ふべきである。食糧にもテントにも或は小さな懷中電氣の如き一つにも登山者の經驗に軍が聽くの雅量あらばこれにより合理的なよき物が生れ出る可能性が多い。前述の地圖の誤謬發見の如きも登山家をおいて他にこれを進言しうる資格ある人は少ないことを知るならば、爰に將兵と登山家とが常にその道に向つて研究することは今後若し日本にも山岳兵の如き特種技能を必要とする部隊が生れるといふ見込ならば、今からでも直ちに立案して日本山岳會あたりが先づ率先してこれに當り御奉公の實をあげることを希望する。濟々たる多士、力に不足はない筈である。

私は多年この事につき關心を有し、機會ある毎に雜誌に又席上に說いてきた。これが若し實現すれば私の滿足とよろこびは大きい、何も私が愛國者だといふのでは決してない。戰火の動きがいよ／＼擴大し急である現在、昨年の如きスキーを見せられると誰れしも憤慨したくなる。敢へて進言する所以である。

（九月廿日）

高山深谷

定價　七圓五十錢
送料　四十五錢

右御入用の方は直接本會へ申込下さい。

折木鑛泉と五社山

行方　沼東

猫鳴山の中平に登つたとき、東北に當つて眞近に形のよい山を見た。それは五社山であつた。三月の中旬私は常磐線廣野の驛に下車して折木鑛泉の若松屋に泊つた。折木川に沿つて約四キロ、山村を連ねる道をとぼとぼ歩いて行くと山影に十軒足らずの村がありその一番奥の家が若松屋であつた。鑛泉は勿論沸し湯ではあるが、つるつると膚に滑らかで如何にも氣持がよく、手拭などの乾くと眞白になるのも面白いことであつた。若松屋は大きな家で三階造り、かうして何百年も前からこの地方の湯治場として知られてゐるのである。主人も女中も皆純朴で親切な人達ばかりである。私は何となく掘り出しものをしたやうな氣易さでその夜ゆつくりと熟睡することが出來た。翌る日握り飯を携へて五社山へと向つたのである。宿の後ろの赤松林をぬけて折木川枝流のへりに出た。何の花もない山の樹の中にアセビの眞白く咲いてゐるのも東北の山らしい。東黒森の山足蛭澤を傳つて行けば、流水は日にきらきらと輝き、落葉の間にはもういくつもの蕗の臺がうすみどりに頭を擡げてゐた。

至るところの山林は伐採されて炭燒の煙は澤の間から何條か立ち昇つてゐた。それでなくとも淺春の雜木山は明るいのに、廣い尾根が春日の中に丸くふくらまつてゐるやうに見えた。流水のつきなんとするところで、東黒森に取りつき右の方へ小徑を登つてゆくと峠のやうなところに出た。そこは東西黒森のなすたるみであつた。少し下つてゆくと廣野町の造林記念碑があつた。そこから五社山は實に堂々とした山麓を天空に展げてゐるのであつた。叶澤に向つてカネシロ坂といふのを下る叶澤は淺見川の上流で五社山に發源してゐるのである。淺見川を渉つていよ〳〵五社への登りになつた右側に切り開きがあつてそれを直登すると短距離であるが、よく通つてゐる道をとつて殆んど五社山を半周する。この山路でミヤマベニシダナライシダ、ミヤマクマワラビを見た。澤の行きづまりから淺見川の本澤に下る道と郡界を論山（八五一メートル）へ辿る道が分岐してゐた。右へ松林の中を登つてゆくと太い樅が枯れたまゝ白骨の麥で天につき立つてゐるところに出た。向ふの小高い突起には樅が黑く茂つてゐる。右へ雜木の間をまた登つて廣い草原に出た。草原の中に小高い丘が二ヶ所ある。東側にあるのが頂上で三角點の標石が建つてゐた。そこは石ころ交りに草も短く土が風雨に洗はれてゐた。草の中に、ヤシヤブシの若木が交つてゐるし枯れた樅がつき立つてゐた。すべては荒々しく荒廢したあとの麥であつた。論山から吃兎屋、猫鳴、三ツ森へ續く阿武隈南部の山波或は木戸川兩岸の丘陵、遠くは吾妻や會津邊の山迄一望のもとに集まつた。大平洋はすぐ眼の下から果しなく擴つてゐた。箒平といふ村も谷の底に見える。小さい藁家の屋根に日が暖かそうに當つてゐた。この廣い山頂にたつたひとりでゐる氣持は格別であつた。風は可成強くひようびようと大空を吹き亘つてゆく。汗ばんだ肌もいつか冷え冷えとしていささか寒さを覺え始めたので、阿武隈の主だつた、山を一つ一つ尋ねて見やうとする私の念願を更らに深くしてこの頂に別れを告げた。高さこそ六八五、二メートルに過ぎないが双葉、石城の郡界に近く淺見川、大久川（おほくさ）の水源をなす五社山は、阿武隈山中の名山たるの貫錄を十分に具へてゐるものと思つてゐる。

英彦山に登つた話

冠松　次郎

私は七月一日二日の二日間、門司鐵道局と朝日新聞社西部本社主催の、英彦山キャンプ練成會へ招ばれて、初めて英彦山に登山することが出來ました。英彦山は高さから云へば慥かに千二百米ですが役の行者程の者が、修驗道の道場とし選んだ位の山ですから、山自身非常に雄大であります。

隆々とした、丸い瘤のやうな岩峯を三つ程連ね、濃密な針葉樹に被はれたその山容はなかなか非凡であつて、富士を繞る千八百米位の山に比敵する程の威容をもつてゐます、私はバスの中から英彦山を初めて見た時、戸隱の表山を思ひ出した程です。登つて見ると岩場は相當雄大で、表口こそ道はなだらかで、杉の喬木に包まれてゐますが、頂上の上宮から北の峯に辿り、豐前坊へ下りて行くと、頂稜からの下りは大きな石溪で、それが隨分急に長く薙き落ちてゐます、豐前坊のある處は壯大な巨壁がそゝり立あ、それが高住神社の御神體となつてゐるのださうです。幽邃な處です。豐前坊を下り杉の木立の間を行くと高原狀の草地に出で、又彦山町へ歸りました英彦山の上は展望がよく、耶馬溪方面は勿論、久住、阿蘇、雲仙それから玄海灘の方もよく見えると云ふことですが、生憎霧が山上を包んでゐた爲展望はきゝませんでした。

行軍、キャンプ、營火、登山皆規律正しく、順序よく行はれたことを私は非常に愉快に思ひました。この行には大阪から四谷龍胤氏が指導者として參加され、福岡縣山岳聯合會の橋本三八氏が隊長として指導をとられました。

私の最も快く感じたことは、この幹部が殆んど日本山岳會員であり、同時に福岡山岳聯合會の會員であり、勿論其他の人もゐたやうですが、皆共同一致少しの蟠りのなかつたことで、北九州の山岳人は、その會が何であらうと決して排他的の考へを持たず打ち解けて協力してゐると云ふ、甚だ良い印象を私に與へました。肝甚な中央の東京ではどうでせうか、私は寧ろこれを却つて福岡に學ぶべきではなからうかとさへ思つたのです

山での責任

跡部昌三

(1)

今年の夏山で、「責任」云々といふ問題にはしなくもぶつつかつた。この種のことは、私としては二度目の經驗である。

最初は、それはちよつと古いことであるが、私の山友達が、秋の前穂北尾根に單獨行して歸らず、新雪の山稜に搜索が續けられたものゝ、空しく、その翌年の夏、前穂頂上直下潤澤側に死體となつて發見された。「責任」といふ問題が出たのは死體搬出に對する上高地での打合會の席に於てである。

死體のかゝつてゐるところは、落石等もあり、その作業は相當困難で、萬一生命の危險のあつた場合には「責任」をもつてほしいといふのが人夫側の言ひ分である。このとき、遺族に代つて言はねばならぬ立場にあつた私は、勿論人としてその樣な場合に顏をそむけてゐられるものではないとは言つた。しかし、問題はその程度にある。だが遺族の代辯者でなく、當の責任者であつたとて「これ、これのことはする」とこの場合はつきり言へるであらうか。

依頼した作業にたをれた人夫の遺族に對して、その後の生活を依頼者側でみることが出來れば、みたところまづ最上級の處置と言へるであらうが、これをもつて猶足らぬといふ人もあらうし、この樣なことに對して、僅かな包金で終つたのも見聞きして來た。

こゝで考へられることは、一體どの程度が一番妥當であるかといふことである。しかし、問題はお互の立場の相違から、話は兎角難しくなり勝ちである。

結局、私と人夫達とは顏見知りの間であり、その席にゐられた奥原英男氏の言もあつて、私も責任者の一人として出來る限りの努力をするからといふことで、一時變な脇道にそれてゐたのも本道に戻り、打合會での「責任」問題はけりがついたのであつた。

あの搬出作業は、案ずるより生むが易しの例への通り、こんな好ましからざる問題を再びむしかへすことなく終つたのは、幸ひであり悦びであつた。

(2)

今年の夏、私は名古屋市主催の女子白馬岳修錬登山に、女子一五〇名程の團體の先導役を引受けて白馬岳へ登つた。その第二日目、白馬鑓に向はんとするとき、人夫側からこの人數では鑓温泉下りは危險だから、大雲溪へ下つてはといふ意見が持出され、へばる人が多く出て、もし怪我でもされたりしてはこちらの「責任」だからといふのである。

初日の日、白馬山荘についてから豫定變更を人夫側から慫慂されてゐた。翌朝、食のすゝまなかつた女の子が、僅かの登りにへばつて、再び出された動議であり、「責任」問題であつたが、私は適宜の處置をとると共に、豫定通り遂行することを主張した。

人夫達の言は無理からぬところはある。また人夫自身にしても、組合としても、責に任ずる氣慨は常にもつてゐて欲しい、しかしこの場合、もし怪我したとしたら、どのやうな「責任」を以てなすべきであるかを自覺しての言なのか、たゞ口先だけの「責任」云々なのか。

この時私は、たとへ遭難問題を惹起したとしても、人夫側へその「責任」を追及しようといふ意志をもつてゐなかつたのと、行を起してよりこの時まで、人夫として當然注意を拂つてくれねばならぬことを、やつてくれてゐたかを考へるに及んで片腹痛い感じをもつたのである。そして人夫のなかで一番よく働いて、氣をくばつてくれたのは、この「責任」云々を言ひ出しはしなかつた。

人夫達の提言を重んずるに吝でではないが、こゝでは、まづ盡せるだけ盡し、私も出來る限りの注意をするから、そして「責任」云々は一應お預りにし、もし間違ひが出來たときはまた考へればよいし過重の迷惑をかけぬからといふことにして行動を起したのである。

天候が素晴しくよかつたせいもあつてか、何事もなく、計畫通りにこの行は終つた。

(3)

この種の「責任」に就て、私はいまゝで多く聞き、且つ見もして來た。冷靜に考へればまだしも、山にあつて、賣り言葉に買ひ言葉的にこれを扱ふにおいては、利害關係を甚だしく伴つてゐるだけ、勢ひ複雜性を帶び、時に感情問題をからませるに至つては、妙にこぢれ勝ちな傾向をもつものである。まして、結果を豫想し、事前にこれを言及することは尙更複雜怪奇になり、その處置は全く困難なことである。

結局、これは人と人との問題である。それなるが故に紛擾し易いことになるが、はつきりしようと思へば、公正證書でも書いておかない限り、心配性の人には安心を得られるものではない。

山で、人夫側から、「責任」といふ言葉を、私は直接に二度聞いた譯である。そのもつ意味は大分異つたものであるが、事が事だけに考へさせられるものを多く含んでゐることを思ひ、勿論「責任」の本質とか、その歸趨を明らかにするといふ難しいことは私の柄でもないので、あつたまゝをこゝに記してみたのである。(八・一八)

會報毎月發行

會報はこの春以來隔月發行となり其上それが容易に出ないといふ狀態となり當事者としては眞に濟まない氣持に終始して來ました。其間是非毎月出して欲しいといふ要望も數多くの會員から提出されましたし鋭意努力の結果此號から印刷所も變へ毎月定期に發行する事になりました。御期待を乞ふと共に我が國の山岳界の正しい發展に寄與する樣な名論卓說紀行會員通信等積極的にお送り下さる事を心から期待する次第であります。

圖書紹介

山頂山麓

深田久彌著

青木書店發行

A5判三一〇頁

定價　三　圓

深田氏の何回目かの山の紀行、隨筆集である。元より書下しなどはないようで、一度は雜誌あたりに執筆したものゝ輯錄である。從つて山の好きな者で山の雜誌などに目を通してゐる人には何處かで一度はお目にかゝつたといつたものもあるに相違なく、慌てゝ飛び付く程の本ではないかも知れない。しかし相當苦心して一册の本に纏められたこの新書を通讀して見ると、氏一流の淡々とした筆致の中に氏の持味がしみ出てゐて遂々ある一つの溫味のある雰圍氣の中に引入れられてしまう。そして流石はと感心させられるのである

深田氏は文學は本業であり、山の紀行などは餘戲として簡單に書きなぐるのだらうと思ふ人があるかも知れないが、私は氏の山に關する文章を讀んで見る如に何時も思ふのであるが、氏は小說などを書く時と殆んど變りなく山の文章を作るのにも相當の苦心をしてゐるのではないかと思はれるのである。それでなかつたら仲々あれだけの味がしみ出て來るものではないと思ふがどんなものであらう。變な引例をして恐縮ではあるが、例へば男女混浴と普通書きがちの所を氏は、大きな浴場で、なみなみと湯が溢れてゐる。老幼男女の別はない。と書いてゐる。何でもない事のようだが老幼の二字を加へてある所に私は限りのない滋味を感ずるのである。又、氏は風景を叙しても出來るだけ大げさな表現をしないように努めてゐるのが目につく。その控へ目の描寫が仲々うまいと思ふ。しかし時には控へ目であり過ぎはしないかとさへ思はれる所もある。

この書の內容だけでも氏の足跡は仲々廣い。そして頗る散在した旅行を好む癖があるのではないかと思ふ。何處か一つの山なり山塊なりに熱中するといふような事はない人らしい。それでゐて八幡平など吹雪の爲に一旦中止しても一週間目に早くも再遊してゐるといゝ熱心さも見られる。そうかと思ふと雨飾など二度やりそこなうと次には知らぬ顏で隣りの燒山へ登つてゐるといふ變り者でもある。私などには到底そんな眞似は出來ないと思ふ。人各々の性格のあらはれで仲々面白い。とにかく深田氏は一通り以上の山への熱情の所有者として敬愛の念を禁じ得ないものがある。

氏は仲々山の寫眞がうまいといふ事を以前から聞いてゐたが、この書にのつてゐるものはどれも一つもうまいと思つたものはなかつた。或は寫眞の方はあまり巧くないのかも知れない。もしそうだとすると反つて愛嬌があつていゝのではないか。文章に感心した上に寫眞迄ほめなくてはならぬようでは提灯持になり過ぎる。

この本は時節柄としては紙質も不滿は言へず裝釘も淸楚で惡くはないと思ふ。氏の變らざる健脚を祈り次の著書にも期待したい。(塚本繁松記)

ゴビ沙漠探檢記

澤壽次著

目黑書店發行

B6判二一五頁

定價　二　圓

本書は讀賣新聞記者である澤壽次氏が、東大多田文男助敎授を隊長とする「ゴビ沙漠學術探檢隊」に加はつて新聞報導の任に當つた折の記錄を一册の書としたもので新聞記事そのまゝであるかどうか不明ではあるが、重復した書振りの多い所を見ると或ひは其儘かも知れない。

この書は題名は「ゴビ沙漠探檢記」と頗る大げさであるが、其實はその東端の一小部分である內蒙古の東ゴビ沙漠を從斷したに過ぎないもので、私など今迄はその邊りは單なる內蒙古の草原地帶と感違ひしてゐた程の所である。從つてこの書看板に僞りありと迄言へなくてもやゝ大げさで人を誤らせ易いが、寶物の事なれば人が間違つて飛びついて來る所をねらつてゐるのが或ひは本根なのであらう「ゴビ沙漠學術探檢隊」にしてからが、我々の目からすれば矢張り大げさで「東ゴビ沙漠學術調査隊」ぐらひに命名出來なかつたものかと思はれる。何しろ近頃の書物は探檢ばやりで、探檢と言ひさへすれば必ず賣れ行きがよいらしく、近頃出た「パラヌンセレベスチモール探檢記」などは凡そ探檢といふには餘りにもかけ離れた旅行記であつた。そんな譯で探檢と名のついた近頃の書物には餘程注意せねばまがひ物をつかまされる恐れがあると思ふ。

この書看板は大げさだが、一行の旅行の目的は純粹な學術研究であり、著者は一人々々の科學者達から聞いた研究の結果を興味深く傳へる爲に苦心をしてゐるようである。しかし私には學者からの受賣りの科學談よりも、見た儘に描寫してある蒙古の自然と人間の生活に多くの興味を感じた。蒙古草原の牧歌的情緒や、蒙古人が酷寒酷暑の自然の中にどんな生活を營んでゐるのかといふ事をこの書によつてかいま見て私は限りない興味と一種の親しさを感じたのである。住居である包そのものが移動性の一種のテントであるのに、ラマ寺のお祭の折など遠方から多くの住民達が乘馬でテントを携帶して來て、寺院の周圍に張つて多數のテント村を作り樂しく祭の終る迄其處で過すのだといつたような話は、テント生活に親しみを持つ私共には言ひしれぬ懷しさを與へるものであつた。又沙漠旅行の終りに近く、一つの湖水の水源らしい湧水を發見して飲んでみるとそれが思ひがけぬ炭酸水であり一行が狂喜してむさぼり飲む邊り、讀み乍ら自分迄嬉しくなつた。

この書は大陸の一部の草原や沙漠の模樣を記したものに過ぎない

が、大陸に關心を持つものにも持たぬ者にも興味深き讀物としておすゝめしていゝ本だと思ふ。今頃としては紙も惡くなく寫眞も多く入つて居り地圖も二つも入つてゐるので大體の要領を得てゐる。此書題名の大げさの外は近頃では良心的な本だと言へよう。（塚本記）

チャムビオン著
三吉 朋十譯

ニューギニヤ探檢記

旺文社發行
定價一圓五十錢

この書は一九二〇年代に英領ニューギニヤの青年官吏であるカリウスとチャムビオンの二人がフライ河を源流迄溯り、當時ドイツから奪つたばかりの新領土を流れるセピック河を下つた記錄で、全コース千數百哩に及び殆んど未開人を相手の長途の苦難に富む旅行記である。場所はニューギニヤの東部地域に限られてゐるとはいふものゝそれでゐて千哩を遙に越へた大旅行となるのだからニューギニヤの大きさが思ひやられる。この書は讀んで興味深々たるものがあるが、略圖などあまりにも大ざつぱなもので、地形だとか河流の狀況など判斷に苦しむ所が多い。たしかに讀んで面白く得る所も多いが紙質製本等はひどいもので、その點では惡書といへよう。

ハイキングペンクラブ著

新しき山の旅

昭和書房發行
B 6 判
定價一圓八十錢

新しき山の旅といふ此書の意味は、東京附近の山々のうち今迄殆んど紹介もされてゐないやうな無名に近い山とか、或ひは餘り人の通ならいコースとかを紹介する意味の名だといふ。ハイキングペンクラブ同人の種々の人々の筆になるものである。

低山の中にも有名なものと無名のものとがある。有名なものは雜踏するだらうから無名なものを選んで靜かな山旅をしたい人には參考になるであらう。

會員通信

越中山岳會報告

島田 武時

昭和十六年春、非常な意氣込を持つて再出發した越中山岳會は其後各會員の努力にもかゝはらず仲々所期の目的に達することの出來ないのは遺憾であるが左記に昨年度より今年に至る業績を報告致します。

昭和十六年六月十五日
富山地學協會
越中山岳會共同主催

講演　高山 湖
田中阿歌麿氏（縣教育會館）
七月一日—三日
山岳寫眞展
（宮市大丸六階ホール）
七月十八日
講演と映畫の會（北日新聞會館）
登山精神と立山の登路に就いて
幹事 石黑 清藏
登山準備に就いて
幹事 山家 基治
八月三日
某師團司令部に出張講演、講習會
牧野平五郎、石黑 清藏
中野峻陽、各幹事出張
八月十六日より
登山講習會
幹事 石黑清藏指導
昭和十七年四月二日より三泊四日間
スキー登山講習會
富山スキー聯盟
越中山岳會共同主催
七月四日
講演 山と人生
田部重治氏（電氣ビル五階ホール）

右の外各月に役員會を開催各月の行事を協議して居ます。そして奬健步行會其他と共同にて徒步運動を盛んに行ひもつて登山準備と健康保持につとめて居ます。このことは登山のために肉體的な準備訓練が不足と思はれる社會人にとつては非常に有効なことでないかと考へて居ます。

會員個人の登山は別として會主催の登山講習會又は產報等に講師を派遣すること等は盛んにやりたいと思つて居ますが色々の事情で仲々理想どほりに行かず殘念に思つて居ます。

藥師岳カール

吉澤 庄作

十月二十八日—八月四日迄有峰から太郎兵衞に出て藥師岳の圈谷群調査の爲東大地理學助教授辻村太郎氏と共に出掛けて來ました藥師のカールの見事さには今更乍ら驚きましたこれは日本に於ける氷河遺蹟として立山雄山西側の「山崎圈谷の端堆石」と共に先づ最初に天然記念物として指定される事になります事を御知らせ申上げます。近日雄山の山崎カール實地踏査に出掛ける豫定です。

蒙古より

北田 正三

紺青の空、赤褐の山肌。水のない河、ひからびた土人の顏、それでも柳の新綠はすばらしい景觀さです。五月から陰山の奥地〇〇〇の廟から〇〇の旗部落へしらみと共に晝は駱駝の背に眠り、夜は百花亂れ咲く野で憩いつゝ遙か西北の果てしない星の下、天山を想ひつづけてゐます。議論も理窟も必要でしよう、だが現下の岳人は脚に物云はしてほしいです。老骨一人尙蒙沙を踏む、若者達の進出を望むや切なり（天津に歸る軍人に托して）祈る同人の健康御を。

○○艦上にて

靑井 竹三郎

赤道を南へ北へ。ある時は印度洋に索敵擊滅の海の勇士と共に艦上生活を續けてゐます。

印度洋はヒマラヤへ通じる道だいつの時かヒマラヤへ日の丸遠征隊が堂々とこの海を押渡る時がくるだらう現實を描き乍ら、祖國の會員諸子の御健闘を祈ります。

南アルプスより

今川 良雄

猛暑の折愈々御清榮の段賀し上げます時節柄一入御多忙、會務處理に盡される方々に只々感謝するのみです、應召や病氣の爲の不運で三度續け樣に中止した夏山を今年は漸く四年振で果し幸ひ天候に惠まれて南方南部の赤石三山で過して來ました。山行も時節柄準備が大變で重量も相當のものとなり、相當苦しい思ひを致しました十五日遠山口から自轉車で元氣良く飛したものゝ二キロも行かぬ中

にパンク、先づ第一同の失敗です北俣渡へ天幕を張りましたが期待した、岩魚釣も、目下工事中の人夫連にしてやられて一尾だに釣れなかつたのは殘念でした。大澤渡まで棧道傳ひ、それより國境尾根まで登りにすつかり延びて了ひ國境着六時半百間洞山の家が見當らず引返して國境の臺地へ天幕を張り午後からズツと包んで居たガスの水滴を御松に吸ひ付いて渴を醫したものでした、山の家への道は此の方面からも露營地からも日中好天ならば問題ではありませんが少々惡い條件の本にも良く分る樣に指標が望ましいものと遂グチが出たものです、訪ねる人の少ないに全く堂々たる小屋で南北を通じて尤なるものでした。宿泊帳の僅かの人名の中に昨年塚本閣治氏の寫眞撮影の爲め六月登山や三田尾氏等の名を見出します。

聖方面の道に反して赤石以北の道の良い事、荒川の登り等は全くハンキングコースと言つた感じで良く踏まれて居ます、、萬助小屋へ入りましたがまだ座板が濡れたまゝの石室でシュラーフ丈では寒くて眠れません、屋根筋の殘雪にテントを張つた方が良かつたと後悔。二軒小屋への降りで雜草に消えた降道を迷ひ一つ屋根を南へ取つた爲氣のついた時は引返すには餘りも降り過ぎて居て材木の流場を不安な思ひで漸く三時間程も遲れて降り重なる失敗に我ながら情なくなりました。二軒小屋まで來るともう里氣分です、東海紙料の專務が來るとかで澤山獲れて居た岩魚も頼み込んで漸く一尾燒いてくれました。ヤレ〳〵。成程翌日歸路、大身のピツケルをグイと握り空身で立派な鉄靴を踏みつけ家來を二列に四人引具して登つて來るお大名に遭ひました、氣の勢か見すぼらしいルンペン山男はヂロ〳〵睨まれて居る樣でした。山中一度夕立に遭ひましたが大變天候に惠まれ快適な山行に三年間のモトを取つた心算でしたが度々の失敗に恥入るのみです。

富士山は手近な爲一月以來毎月一回登つて來ましたが昨今の大繁昌に少々遠慮して居ます、新雪を待ちましよう。七月廿二日

會員　丸山　晩霞氏

丸山晩霞氏（會員番號一三〇番明治四十年九月入會）は昨秋來鄕里信州の羽衣莊のアトリエで病氣療養中であつたが三月四日遂に逝去された。享年七十六歳。氏は何人も知るやうに古くからの水採を以てする山岳畫家で、山の繪を通じ私共には久しきにわたる馴染深い方であつた。相當の御老齡とは言へ今氏を失ふ事は誠に哀悼にたへず本會は謹んで哀悼の意を表する次第である。

會員　矢澤米三郎氏

矢澤米三郎氏（會員番號九八番明治三十九年九月入會）。

丸山氏の訃を聞いて間もなく又も信州出身の矢澤米三郎氏逝去の報を聞いた。氏は故河野齡三氏と共に多年長野縣の教育家として、又日本アルプス開拓者として令名あり、河野氏との共著になる日本アルプス登山案内其他の著書も多く、多くの登山家に親しまれた方であつた。本會はこの貴重なる創期會員を失つた事を痛惜し深く哀悼の意を表する次第である。逝去三月三十一日、享年七十五歳。

會員　櫻內　敏雄氏

櫻內敏雄氏（會員番號一一七〇番昭和五年五月入會）は六月九日急病の爲卒然として逝つた。氏は九段下俎橋際に寫眞材料を業としその方面でなじみ多かつたのであるが急逝を惜しむや切なるものがある。享年四十歳。本會は謹しんで深く哀悼の意を表する次第である。

會員　佐野　和男氏

佐野和男氏（會員番號一八一四番昭和十五年六月入會）は早大山岳部代表委員として活躍中、今春穗高涸澤合宿中病を得、爾來療養に努め來り快癒に赴きたる由承りたる所俄かに惡化して六月十五日卒然として去る。本會としても同氏の將來に期待する事大きかつたのに惜みても餘りある次第、本會は此處に謹んで深く哀悼の意を捧げたい。享年僅かに二十四歳であつた。

會員總會

昭和十七年度通常總會は五月十五日午後六時より日本商工倶樂部にて開催左の通り議決す

議長　槇　副會長

議事報告及說明　塚本幹事

議題

一、昭和十六年度歳入歳出決算報告

一、昭和十七年度豫算附議

一、終身會費の變更

定款第六條第二項を次の通り變更

終身會員ハ前號ニ準ジ一時金百五十圓以上ヲ納メタル者又ハ入會滿十年以上ヲ經過シタル通常會員ニシテ一時金百圓以上ヲ納メタル者トス

一、定款第二十一條の變更

次の通り變更の事

總會ノ招集ハ十日以前ニ會議ノ

陸地測量部地圖販賣制限に就て

最近陸地測量部發行の地形圖等の販賣が著しく制限されるに至りましたので、不自由を感じてゐる方も定めし多い事と存じます。本會と致しましても事の重大性を思ひ、制限の主旨を陸地測量部當局に問合せる事に致しました。

次に本會役員が陸地測量部某要路者と會見して確め得た事を非公式乍ら御知らせ致します。

一、今回の制限は一時的のものでなく相當恒久的のものである。

一、目的は主として防諜の爲であり登山用の地形圖迄制限を行ふような考は全然持たない。

一、從つて販賣の制限もそんなに嚴重なものではない。

一、然るに官報に發表された爲警察署や憲兵隊では相當重大に解釋したらしく販賣許可を容易にせない樣子なので、今少し簡單に許可出來るような方法を考慮中である。

大體右のような回答を得ましたので今後の成行を見守る事に致します。

目的タル事項、日時及場所ヲ示シ之ヲ爲スコトヲ要ス

一、新幹事推擧

役員總會の推薦したる候補者

粟飯原健三、富田健一、吉阪隆正、小原勝郎、織内信彦、兼松學、海瀬榮一郎

右各事項異議なく可決成立す

尙總會通知狀にて推薦したる新幹事候補者中に誤つて粟飯原富田、吉阪の三氏名を脫落したる事を陳謝諒承を求めたり

又新幹事中には定款による入會後滿三年を經ざる者あるも、右は非常時局下の非常處置として役員總會にて決定せるものにして、狀態緩和されたる場合は定款通りに復歸する事とし當分の非常處置を諒承されたき旨懇請、出席者の承認を得たり

出席者　塚本繁松、槇有恒、三田幸夫、酒井忠一、大石三代吉、沼井鐵太郎、松野節夫、奈良善五郎、藤野關夫、田邊主計、盛岡英治郎、初見一雄、田中常介、兼松學、日本大學山岳部、二高山岳部、野口末延、石塚秀次郎、織内信彦、田中實、江口佳之、今野泰三、早川義郎、名須川渡、網藏志朗、石山賢三郎、諸岡一次、學習院山岳部、村尾金二、五十嵐清三郎、木村鑛吉、委任出席一一二九名

講演會

會員總會終了後午後七時より同會場にて左記の通り講演會を開催した。出席者は總會出席者の外會員外十九名。

一、山及スキーに因る災害の統計醫學的調査並に其の防止對策（主として長澤豐氏の論文、登山及びスキーに於ける遭難者の運動醫學的統計學的觀察並にその防止對策）第一報谷川岳を紹介。（右論文は小島氏より寄贈を受け全出席者に配布した）

全日本スキー聯盟會長小島三郎氏

一、飯豐山に就て

二高山岳會　野口義孝氏

右二講演は一は目下世人の注目の的となつてゐる谷川岳の遭難についての眞摯な研究の發表であり一は二高山岳會の數十年にわたる眞劍なる踏査研究の概觀を話されたもので、出席者の多大の感興を呼び、九時半盛會裡に閉會した。

第九十九回小集會

昭和十七年六月二十四日
於日本商工倶樂部

フイリツピンの人と自然　中屋健弐氏

ニウギニア北岸旅行談　猪熊泰三氏

六月二十四日小集會に於て右の通り二人の講演者によつて興味のある話をきくことが出來た。司會者は兼松學氏、參會者は別記の如く約八十名であつた。

これらの土地については今人々は多くの關心を持つてゐる。赤道の彼方にある、少し前までは隨分遠方だと思つてゐた土地も現在では誠に身近く感じるのである。

中屋氏は同盟通信社のマニラ支局長として、開戰直前まで彼地にゐた人である、近著「フイリツピン」を讀んだ人はこの人がフイリツピンの事情――殊に住民に關して――に詳しいことを知る。今回の話も主として氣候、住民に就てであつた。中屋氏は彼地に於て山へ登らなかつた一つの理由としてその地の極めて蒸し暑い氣候を擧げた。それは人間の住むに快適な氣候からまるでかけ離れてゐる。又フイリツピン人なるものが甚だ單純でない人種であるのも注意をひいたことであつた。

猪熊氏は東京帝國大學農學部の人である。今度の話も昭和十四年北岸地方の植物資源の調査に赴かれた時のことを主としてゐた。矢張り氣候、住民、自然界等についてである。私の知人の多くは文明の土地例へば巴里とか紐育とかの話よりも常に未開の土地の話に興味を抱く。私は少し前に山本由松氏の蘭印植物紀行といふ書物を讀んだが、どうも植物紀行の話は樂しい。今回の小集會は二時間半程の時間に二つの講演があつたのでいづれも短かくて誠に惜しいと思つた。一人だつたらもつと多くの事柄を知り得ただらうに。例へばニウギニヤについては人々はすぐ赤道下雪を戴く高峯カルステンヅの事を頭に浮べる。又、ロレンツやアーチボルトの探險についてもいろ〳〵知りたいと希ふ。猪熊氏も日數の關係其他のため、彼地の登山、奥地旅行はされなかつたのであつたが、話はそれらの探險に及んだ。ことにロレンツ探險の大部な報告書、今次大戰によつて中斷されたアーチボルト探檢のことから我々は我國人がその後の探險を引續ぐわけであらうと思ひ、多大の期待を持つてゐる。

當日はむし暑かつたが會場の窓からは風が入り、夕空には何となく秋を想はせる雲が見られた。平素御ぶさたをしてゐる人々に小集會で會つて短い休憩の時間に一別以來の話をしたりするのも樂しい。

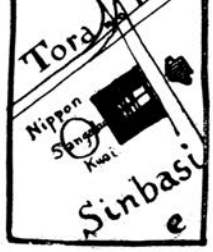
（田邊主計）

出席者　猪熊泰三、中屋健弐、塚本繁松、笹見修丞、堀田彌一、佐藤誠次郎、太田又一、小林清孝、藤野關夫、兼松學、山口京一、柴山登茂次、織内信彦、關根吉郎、野口末延、藤澤乙三、若林祐次郎、田邊主計、加藤誠平、櫻井信雄、辻村克良、福田源一郎、神谷恭、中島卯三郎、東濱義男、青木正雄、三崎榮一、木村鑛吉、鈴木弘、小林民雄、茨木猪之吉、井上良則、飯田雄二、早川義郎、槇有恒、矢田城太郎、島田巽、佐藤テル、岩永信雄、梅澤嘉一郎、內山均、福田嘉四郎、酒井忠一、石原憲治、小野友次郎、吉阪隆正、沼井鐵太郎、吉田竹志、進藤波男、采野善治郎、山根雅男、鈴木八十吉、安江安宣、太田敬、松田一郎外會員外二十五名。

會務報告

七月常務役員會

七月九日午後七時於事務所開催
出席者　槇、沼井、木村、高頭、小原、吉阪、塚本、中司、兼松、



茨木、早川、織内
委任　鳥山外十名
議長　槇理事
議事
一、山岳講座開催ノ件（關西支部）
イ、冬山講座開催ハ支部ニ一任ノ事
ロ、主催ヲ本會トスルカ支部トスルカモ支部ニ一任
ハ、講座記錄出版ノ場合ハ支部編纂ノ名儀トスルコト
一、南方ノ山編纂ノ件
ニウギニア（安江安宣）濠州ニウジランド（吉澤一郎）ソノ他（吉阪隆正）右執筆方依頼スルコトトス
一、登山年譜ノ件
イ、目下委員五名ノ承諾ヲ得タリ
ロ、沼井評議員調査中ノモノハ明治四十年前後ノ分カード大略完成
一、入會申込者七名入會承認

八月常務役員會報告

八月二十日午後七時於事務所開催
出席者　木暮、槇、鳥山、沼井、額田、中司、木村、塚本
委任　五名
議長　木暮理事
議題
一　南方ノ山編纂委員缺員ノ件
一、會報編輯者缺員ノ件
吉阪幹事應召ニヨル後任トシテ田邊主計氏ニ依頼スル事トス
一、逸見幹事南方出向ノ件
右ノ爲幹事二名缺員トナリタルヲ以て其補充方ヲ決定ス
一、評議員ニ關スル内規ノ件
一、登山年譜委員委囑ノ件
沼井鐵太郎、岩永信雄、辻村克良、小野幸、錦織保清、三田幸夫
一、入會申込者五名承認
尚今回已ムヲ得ズ辭任サレタル逸見、吉阪兩氏ニ對シ本會ハ深ク謝意ヲ表スルモノナリ

圖書基金受入

四口金貳拾圓也　中屋健弐氏

日本山岳會昭和16年度歳入歳出決算

歳入ノ部	
會費及入會金	9,603.50
入會金	1.190.00
會費	8,413.50
雜收入	5,219.55
印税	2,073.50
出版物賣却代	2,421.75
廣告料	271.00
利子	32.97
圖書基金	45.00
其他ノ雜收入	375.33
假受金	49.70
假拂金返還	954.18
前年度繰越金	2,373.21
合計	18,200.14
歳出ノ部	
事業費	9,510.09
山岳出版費	1,651.57
會報費	1,889.56
編輯費	1,434.85
（山岳、會報、山日記、高山深谷ヲ含ム）	
研究調査費	171.20
通信運搬費	997.91
關西支部費	850.00
集會費	429.60
會員名簿費	231.00
頒布用出版物代	1,854.40
事務費	4,149.96
借室料	1,050.00
俸給	1,130.00
交通費	206.52
電話費	86.55
用紙文具印刷物費	710.24
備品費	120.00
雜費	846.65
假受金支拂	42.00
假拂金	1,019.18
歳入歳出差引剩余金	3,478.91
合計	18,400.14

右之通ニ候
昭和十七年四月

社團法人　日本山岳會

日本山岳會昭和17年度豫算

歳入ノ部	
會費及入會金	7,500.00
入會金	500.00
會費	7,000.00
雜收入	950.00
印税	300.00
出版物賣却益金	200.00
廣告料	150.00
利子	300.00
前年度繰越金	3,478.91
合計	11,928.91
歳出ノ部	
事業費	8.578.91
山岳印刷費	2,900.00
（三十六年二號費900.00共）	
會報費	700.00
會員名簿費	350.00
集會講演會費	350.00
研究調査費	300.00
編輯費	500.00
發送費	700.00
通信費	350.00
關西支部費	850.00
豫備費	858.91
十六年度終身會費基金繰入	720.00
事務費	3,350.00
借室料	840.00
俸給	1,260.00
電話費	100.00
交通費	150.00
用紙文具印刷物等	500.00
雜費	500.00
合計	11.928.91

山岳第三十七年
第一號豫告

内容

山に省みる　小暮理太郎
第二回冠帽峯　早大山岳部
繪畫に表はれた雪崩　勝見　勝
カンチェンジュンガ　吉阪隆正譯
飯豊山頼母木川　二高山岳部
船形山　同
實川を下る　吉澤一郎
伊豆遠笠山　中村謙
其他

大體右のやうな内容を以て目下組版中であります。是非年内に御手許に屆くようにと努力しましたが、どうも一月になりそうであります今暫く御猶豫下さい。その變りに紙の極めて不自由な時節にも係らず最上質紙を使用し立派なものを御屆け致します。

財産目録
（昭和十七年三月三十一日現在）

社團法人　日本山岳會

一、資産總額　一九、三五二・二四円

内基本財産
普通財産　八、八五七・五三
外ニ普通財産備品及圖書ノ價格　三、八九八・九一
六、五九五・八〇

二、資産内譯

（一）預金

資産種別	類	預入先	券面額又ハ殘高	利率	備考
基本財産	金錢信託	三井信託東京支店	八、八三二・三三	年三分八厘	コノ分五月五日現在關西支部分
	振替貯金基本金	貯金局	五・〇		
小計			八、八三七・三三		
普通財産	特別當座預金	日本晝夜銀行	二、九三六・四八	百圓ニ付日歩六厘	
	振替貯金	貯金局	二〇九・二四		
	借室敷金	鈴木豊吉	三〇〇・〇〇	無利息	貯金局四月二日現在
	同	大阪貯蓄銀行	一二〇・〇〇	同	不二屋ビル借室敷金
					大阪貯蓄銀行借室敷金
小計			三、五六五・七二		
合計			二、四三三・二五		

（二）有價證券　ナシ

（三）現金

資産種別	類	金額	備考
普通財産	現金	三三三・一九	事務所保管

（四）備品及圖書（評價額）

資産種別	類	數量	價格	備考
普通財産備品	什器雜品	九四個	二、四〇〇・〇〇	
備品内譯	電話	一個	六五〇・〇〇	内二個（一五〇圓）ハ關西支部保管
	タイプライター	一個	一、一〇〇・〇〇	
	幻燈機械	一式	二〇〇・〇〇	
	圖書	三、二八二冊	四五〇・〇〇	原板七〇〇枚ヲ含ム
圖書内譯	洋書	六一六冊	四、一九五・八〇	内四五冊（三三五圓）ハ關西支部保管
	和書	二、六六六冊	三・二一〇・〇〇	内三五冊（三五圓）ハ關西支部保管
計			九八五・八〇	
			六、五五五・八〇	

尚基本財産金錢信託ノ約一、〇〇〇圓增加シタルハ昭和十六年度中ノ終身會費及信託十六年上半期利子ヲ預入シタルニヨル
又基本財産中振替貯金基金ノ五圓ニ減額シタルハ規則改正ニヨリ基金五金ヲ關西支部振替貯金殘高ニ繰入レタル爲ナリ（昭和十七年五月）

編輯後記

本號の原稿を印刷屋に渡しましたのが九月の半ばでありましたがどうにも組版に着手しない模樣に遂にそれを取戻して新印刷所に託する事にしました。此號を最後にきちん〳〵と毎月出せるように極力努力致しますから御諒承の程を願ひ上げます。

南方の戰鬪が益々熾烈化すると共に國内の登山界にも嶮しい流れが尙盛に交錯してゐるようであります。こんな事は一日も早く淸算して明朗な氣持で一路最後の勝利へと邁進したいものであります。戰爭が劇しくなり生活が窮屈になれば勢ひ人心も嶮しくなるのは致し方もないでせうが、ゆとりといふものがなかつたら最後の勝利は得られますまい我々は幸にも山といふ大自然を相手とするゆとりを持つてゐます。これを堅持して戰ひ抜きませう。（十一月塚本記）

昭和17年11月30日 印刷納本
昭和17年12月7日 發行
頒價二〇錢
編輯兼發行者 日本山岳會内 塚本繁松
東京市芝區拳平町一（不二屋ビル）
發行所 社團法人 日本山岳會
電話芝（四三）一六四九
振替東京四八二九
東京市麻布區宮下町四四番地
印刷者 杉原義彌
東京市麻布區宮下町四四番地
印刷所 共和印刷社
電話赤坂（48）二三四三（東東二二七六）
東京市神田區淡路町二丁目九番地
配給元 日本出版配給株式會社

山と溪谷社編・足立源一郎裝

登山講座

全山岳界の熱烈なる支持の下に第三卷十一月末日刊行。一部2.20送.15
全六册揃13.20買切制に付直接本社注文又は書店へ御申込下さい。

第三卷内容—陸軍のスキー教育（溫品少佐）海軍スキー隊（森山大佐）雪の畫集（上田徹雄）冬の歌集（前田夕暮・結城哀草果）雪の詩集（高木高）雪上の足跡（犬飼哲夫）冬の季節風（大谷東平）降雪（國富信一）雪崩・霧氷・樹氷（安齋徹）スキー醫學（廣瀨甚吾）本邦スキー史（故鶴見宣信）氷雪技術 村井榮一）雪上幕營と雪洞（故森幸治）雪具考（早川孝太郎）ワックスの科學（西村實）同技術（長田進）あざらし皮（西岡一雄）一般スキー術（千家哲麿）スキー講習會（岩崎三郎）スキー體操（泉掬次郎）雪質とクリスチャニア（三浦敬三）輪かんじき、雪崩の方言分布（高橋文太郎）スキー破損の應急修理（小里秋穗）製衣走スキー（高橋健治）スキーの木部（故小笠原二郎）全國スキー地案内（一流スキー人總執筆）歐文山岳語彙（牧田滿政—原稿百廿枚の力作）附錄スキー體操圖解並に月報八頁

塚本閤治編・日本山岳寫眞叢書

雪の上信國境

奥秩父・白馬岳の後を受けて白雪の殿堂上信國境十一月下旬刊行さる
寫眞と文に由る、新軌軸の案内書・定價1.80 送料10 以下續々刊行。

山と溪谷第75號南アルプスと前衛の山々殘部僅少。第76號發賣中。

一部.70 送料.12 一箇年六册 4.20 【圖書目錄進呈】

東京市芝區田村町6—4 山と溪谷社 電話（芝）543 振替（東京）60239

キスリング型（E式）
ルックザック
御手元にある布地御持參になれば
御作り致します

山とスキー具專門
東京市神田區神保町三ノ一（專修大學電停前）
片桐テント登山具店
電話九段（33）三二一〇番
振替口座東京九一一八四番